

## 「 $2 \div 3$ 」 ショック

平成20年度全国学力・学習状況調査の小学校算数Aに、次のような問題がありました。

2 ÷ 3 (商を分数で表しましょう。)

この問題を見た時は、「『商』の意味に戸惑う児童が多少いるかもしれないが、正答率はそんなに低くないだろう。」と予想していました。

しかし、8月にはこの予想と異なる結果を受け取りました。

正答率    山口県59.3% (全国73.7%)

全国と比べて、14.4ポイント低くなっており、本年度実施された問題の全設問の中では、全国平均と最も大きな差となっていたのです。

また、解答ごとの児童の割合は次のようになっていました。

$\frac{2}{3}$	$\frac{3}{2}$	0.66、0.67など、商を小数で表しているもの	左記以外の解答	無解答
59.3%	6.2%	5.5%	21.2%	7.7%

## すぐに できる問題

「山口県の子どもたちは、なぜ“ $2 \div 3$ ”ができないのか」

このことについて、教科書でどのように取り扱われているかを調べながら議論をしました。議論の中で、「1時間の授業の中では、多くの児童が抵抗なくできるのではないか」ということができてきました。

この学習に該当する教科書の構成では、最後の方に“ $\bigcirc \div \bigcirc$ ”の商を分数で表しましょう」という練習問題が数問示されています。ある程度の学習をした段階であれば、多くの子どもたちが正解するであろうと考えました。

## 学習システムの 定着

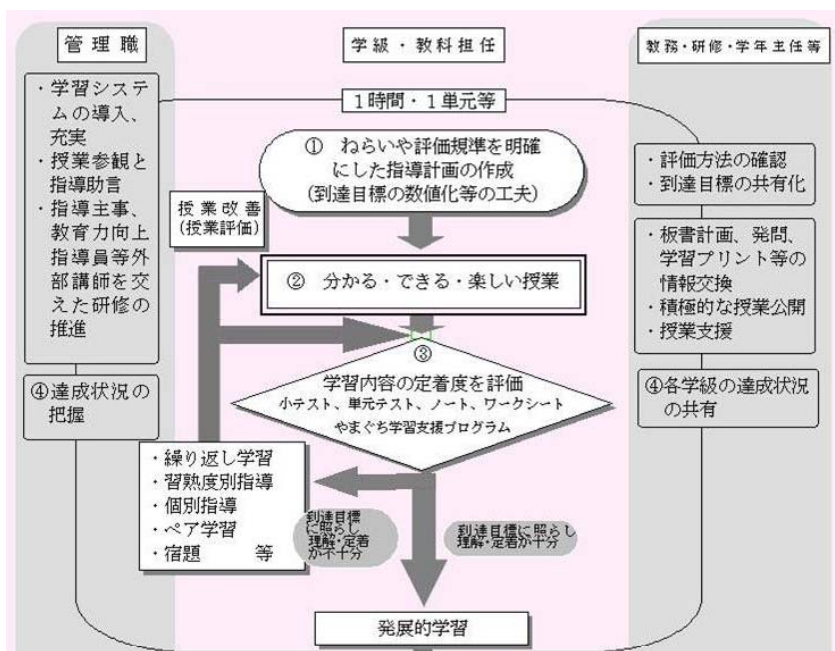
学校訪問等で多くの算数の授業を参観させていただいていますが、1時間1時間の授業はよく工夫され、子どもたちが理解しているかどうかともノートをチェックするなどていねいな取組がなされています。

ただ、長いスパンで学習内容が定着しているかどうかを確認し、子どもたちの状況に応じて補充学習や発展学習を行うなどの取組が十分であったかどうかを見直す必要があるのではないかと、との議論に発展していきました。

先に紹介した「 $2 \div 3$ 」の問題に関する解答ごとの児童数の割合からみても、計算の仕方が身に付いていないだけではなく、「わり算の結果は、分数を用いると簡単に表すことができる」ことを理解していない児童が多いのではないかと考えられ、分数の意味について、確実に理解できるよう繰り返し指導することが大切ではないかと考察を進めました。

その議論を踏まえ、義務教育課から配付した文書が、平成20年10月10日付け平20教義第717号「児童生徒の学力の定着・向上のための重点的な取組について」です。

この文書では、次のような図を示しています。内容としては、当たり前のことなのですが、この当たり前のことを確実に取り組んでいこうという趣旨で作成しています。



## 指導計画の見直し

具体的には、単元の指導計画や年間の指導計画に、定着状況や評価する時間、状況に応じた補充学習等がきちんと位置付けられ、確実に実践されているかを見直すということが必要になります。

算数の研究授業を見せていただく時には、指導案の指導計画に着目しています。単元の最後に「復習」という時間が1時間設定してあることが多いのですが、学習内容の定着という点では、1時間の授業の工夫とともに、指導計画の工夫・改善も大切なことだと考えているからです。

算数の場合、教科書に単元末の復習、学期末の復習、学年末の復習等が位置付けられていますので、学習システムの確実な取組のため、効果的に活用していくことがよいでしょう。

## 各学校での取組

県教委では、一つの設問の結果からこのような対応をいたしました。各学校においても、具体的な結果から全教員でその要因を分析し、具体的な改善策を進めてほしいと思います。

### 学力調査考

「学力調査の結果に一喜一憂することはない。」

「学力調査の結果が全てではない。」

などの声を耳にします。

確かに、学力調査により測定できるのは学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面であることはいまでもありません。しかし、「学力の特定の一部」であり「教育活動の一側面」であるので、結果について軽んじてよいという考え方にはつながりません。

山口県の子どもたちに、学力の特定の一部とはいえ、身に付けさせるべき学習内容（例えば“ $2 \div 3$ ”）が、十分に身に付いていなかったことは事実であり、保護者の方方もそのことを知っておられます。このことを真摯に受け止め、保護者や県民の信頼に応えられるよう、そして何より子どもたちに力を付けられるよう、教育関係者一丸となって、実効性のある取組を進めていきましょう。